Research Institute for World History
Newsletter
No. 33 July 2019

世界史研究所「ニューズレター」
第33号（2019年7月）

CONTENTS

■ AAWH2019 大阪大会における報告について　吉嶺茂樹　— 1 頁
■ AAWH2019 大阪大会参加記　中山拓憲　— 3 頁
■ AAWH 大阪大会に参加して　小林昭菜　— 5 頁
■ シリーズ「日本の中の世界史」全 7 巻完結　— 6 頁
■ World History Teaching in Asia 刊行　— 7 頁

発行： NPO-IF 世界史研究所 http://www.npo-if.jp/riwh/

AAWH2019 大阪大会における報告について

吉嶺茂樹（北海道有朋高等学校）

AAWH2019 大会は、開会直前での瀋陽から大阪への開催地変更などがあったものの、大変有意義な大会であった。筆者は、世界史研究所所長の南塚先生が企画されたパネルに基づき、アヘン戦争期の日本と開国の状況について、当時の海外情勢の把握の方法や政策決定のあり方などにも触れながら、日本における特殊な事情についても報告をおこなった。[1]

筆者は「北方」における対外交渉を、幕末期の宗谷場所に残された史料から分析している者である。近年の北方史研究によると、幕末期の函館奉行所は幕府と折衝を行いながら、長崎の外国奉行とも対立しつつ、上海まで独自の交易船派遣まで行っていたことなどが明らかになりつつある。函館奉行所には当時幕府から若手の経済官僚が勤番されていた。彼らは長崎における俵物の買い上げ価格統制に反対する意見書を提出するなど、政策提言を行っている。なお最終的に幕府の崩壊によってこうした提言は実現しなかった。この研究内容については、一部を本年二月の歴史文化交流フォーラムで報告させていただいた。[2]

時期は前後するが、今回の AAWH 報告では、こうした研究を踏まえて、1840 年代以降の国際認識がどのような形で行われていたのかを報告したものである。このパネルの内容について、世界史研究所では東京とフィリピンでのワークショップ、メール上の意見交換など様々な媒体を利用してアジア 8 か国間の中等教育における世界史教育の国際比較を

行ってきた。その成果は本年５月にアメリカの出版社より発刊された。[3] アヘン戦争に関する国際比較の内容はこの書籍にも言及されているが、その具体的な事例として、アジア各国におけるアヘン戦争の影響を比較検討したのが今回の報告である。

アヘン戦争は、列強による中国大陸支配の起点であったとともに、幕末日本の対外政策に変更を迫り、やがて日本による周辺アジア地域の植民地化をもたらした。アヘン戦争がアジア各国にどのような影響を与えたかを比較検討する事が、このような日本近代史批判に他ならないことは、コメンテーターからも指摘された。

これに対して、北海道で中等教育にあたっている者として、筆者は以下のように答えた。「北海道＝蝦夷地にとって、その『帝国としての近代史』は『内国植民地化の過程』です。ここでは先住民アイヌに対する『日本人』化政策が行われました。沖縄も、同様です。ですからこうした、『支配－被支配』の国内におけるあり方は、ナショナリズムと地域の問題につながっていくのだろうと北海道の教育現場に居て考えています。なお私自身は北海道に生まれ育った者ではありません。教育現場において、授業の中で近代のある史実を国際的な観点から比較検討する意味は、こうした二重三重の輪を、正解の無い形で生徒と一緒に問い直していく作業の中にあるのではないでしょうか」。

この返答に対して、コメンテーターからはパネル後に、非常にユニークな返答だったという意見が寄せられた。つまり、我々は単純に「一国史」としての近代史比較を行いがちだが、その「一国史」自体が重層的な「支配－被支配」関係を内に持っていて、その「被支配」の側から見た「帝国近代史」は、いわゆるステレオタイプ化した我々の歴史認識自体を再検討する事につながるだろう。がんばってください、という声援と受け止めた。

これ以外にも、AAWH では非常に有意義な時間を過ごすことができた。一緒にパネルを行った Francis Alvarez GEALOGO (Ateneo de Manila University) さんとは、最終日の夕食後、ライトアップされた大阪・中之島を二人で約２時間かけて巡検しながら、歩いて宿までお連れした。お互いの歴史研究のテーマはもちろんのこと、近代史における大阪の位置づけやそれを示す堂島の建築物群や銅像、日本史の授業における大阪の描かれ方、それに対する的確な質問など、大会を終えて、多少アルコールの入った頭には心地よい時間であった。

いくつかのパネルにも参加させていただいた。特に大連理工大学の MA Wanli　さんとは、コーヒーの近代史について貴重な討論を行うことができた。MA さんは、中国近代史におけるモノの歴史について報告をされ、その中の一つとしてコーヒーの問題を取り上げられた。筆者は 1854 年の宗谷場所におけるコーヒー飲料の史料を紹介し、これが北海道立文書館 HP から PDF で閲覧できる事を紹介した。MA さんからは、「コーヒー・ルートが当時の蝦夷地までつながっていることは知りませんでした」「今、まとめている本の中で、必ず後書きに取り上げます！」との言葉をいただき、帰国後

メールのやりとりを行った。PDF の所在も URL で教示することができた。

私は道立高校の教員であるが、こうした機会を利用して海外の研究者と討論できる場が教員にも開かれていることは大変ありがたい。AAWH がその設立大会から、歴史教育の問題をテーマの一つとして必ず取り上げてくれていることがその背景にあると思う。初代の会長を務められた南塚先生の世界史教育に対する思いを実際の現場で生かしていくために、今後も研究を進めていくつもりである。

（注）

1

4th AAWH Congress in Osaka, 2019 - Creating World Histories from Asian Perspectives - Panel 4 -1 The Opium War and other Encounters with the West as the Roots ofAsian Awakening https://docs.wixstatic.com/ugd/0b4e0c_97f26b435e614f558d45051c713dd53f.pdf0b4e0c_97f26b435e614f558d45051c713dd53f.pdf

2

http://www.npo-if.jp/forum/page/2/

3

MINAMIZUKA Shingo (ed.), *World Hisory Teaching in Asia: A Comparative Survey,* (Berkshire, 2019).

AAWH2019 大阪大会参加記

中山拓憲（神奈川県立舞岡高等学校）

はじめに

2019 年 1 月 5 日、6 日に大阪で開催された AAWH 大阪大会に、私の所属する神奈川県の社会科部会歴史分科会世界史研究推進委員会（以下、世界史推進）を中心にパネルを出させていただき、その中で私も報告を行わせていただいた。また、いくつかのパネルや基調講演を見学させていただき、また懇親会でも様々な先生方にご教示いただくことができた。

パネルと報告の内容

我々のパネルのタイトルは、"Teaching the Exchange between Asian Regions and Japan in the Age of Imperialism: Practices in High Schools in Japan" つまり、「帝国主義時代のアジアと日本の交流を教えること。－日本の高等学校における実践」であった。世界史推進では、もともと新教科歴史総合の設置が決まる前から、日本史と世界史を融合した授業研究を行い、県内の大会で実践報告を行っていた。それを澤野理がとりまとめ、そこに韓国の Minkyu Kim 先生と、アメリカの Lisa Riggin 先生の協力をいただき発表することができた。

パネル全体の問題意識としては、学校現場の歴史の授業における、日本史と世界史の分断が一つある。教科書をよく見れば、日本史の教科書に世界のことが、世界史の教科書に日本のことが載っているが、そ

ういった箇所は飛ばされ別個の歴史のように教えられる。だから生徒の頭の中でも、日本と世界は別個のものとして記憶されるということである。しかし 2020 年からは、日本史と世界史を融合した歴史総合が始まることが決定している。それに向けた実践報告を行った。

智野豊彦は日本とトルコの歴史の話をした。エルトゥール号事件を、日本人がオスマン帝国の人々を助けた美談として描くのではなく、当時のオスマン帝国の状況、日本政府の対応など様々な面から見る実践報告であった。

神田基成が、植民地台湾における知識人の運動をインドと比較するという実践報告であった。インドも、台湾も決して一枚岩ではなく、多様な人々がいたということが聞き取れた。

私は、「植民地期の日本における朝鮮人」というタイトルで、日本と朝鮮の関係についての授業実践を報告した。最近、インターネットや雑誌などで、「在日朝鮮人は自分の国でもないのになぜ日本にいるのだ。自国に帰れ」といったような、失礼な言葉が飛び交っていることに危機感を覚え、考えた授業である。この授業を通じて、なぜ日本に朝鮮人が住むようになったか、なぜ朝鮮に帰れない（帰らない）のかを、史料などを用いて考えさせた。もう一つ、タイトルにある「日本」が、決して日本列島や日本人だけを指すのではないと言うことに気づかせたかった。日本史の授業では、台湾や朝鮮、サハリンなどを植民地にしたにもかかわらず、ほとんど日本列島の日本人の歴史しか書かれない。日本が支配していたからと言う理由で、世界史でもほぼ語られない。私は生徒に、サハリンに朝鮮人が住んでいる 1990 年頃の写真を見せて、なぜサハリンに日本人がいるのかを聞く。そこで、サハリンも朝鮮も日本の植民地になっていたということに気づく生徒が出てきた。生徒の感想を見ると、衝撃を受けていた生徒や、朝鮮人に味方する意見は少なくなかった。

3 人が発表した後、Kim 先生や Riggin 先生から有意義なコメントをもらった。その後、討論会も行われた。英語の質問、討論についていくのは大変であったが、印象に残っているのは、様々な国の高校教員が会って、話をすることができたらいいのではないかと言う話であった。今回、初めてパネルに参加させていただき、とてもいい経験ができたと感じる一方で、様々な課題を感じた。次の機会に向けて準備したい。

基調講演等、AAWH 全体への感想

次に、他のパネルや、基調講演を聴いた感想を書かせていただきたい。私が最も驚いたのは、ほとんどのパネルでレジュメが配られなかったことである。日本の大会では、大量のレジュメが配られ、それにメモをとりながら話を聞く。私などは、そういった日本のあり方に慣れているが、外国の方からすると、みんな下を向きながら話を聞くというのは異様かもしれない。正直な気持ちを言えば、日本人の報告者だけでも、スライドのコピーなどを配っていただけたらありがたかった。Li Bozhong 先生の基調講演では、話す台本がすべてプロジェクターに映し出され、それを見ながら話を聞くと

いうもので、英語が母語でない中ではわかりやすかった。シルクロードについての興味深い講演で会った。インドの Aditya Mukherjee 先生の発表は、レジュメもプロジェクターもなしでひたすら１時間英語で話し続けると言うものであった。IT 大国なのに、意外に感じたが、これは一番話に集中できる講義スタイルなのかもしれないと感じた。正直、私の英語力では聞こうとすることはできても、頭に入ってこなかった。ただし、これがインド人に一般的なスタイルなのだとすると、次回のインド大会ではこういう発表が増えることが考えられる。そこに耐えられるだけの英語力を身につけたいと感じた。

おわりに

最後に、今回、神奈川県の社会科部会歴史分科会でパネルを出すことができたのは、大阪大学の桃木先生、秋田先生など多数の先生方のご支援があったからである。また今回パネルに参加した澤野と私中山は千葉大学の卒業生であり、様々な面で南塚先生にお世話になっている。現在、部会では、先生の『「連動」する世界史』の読書会を行っており、先生の著書から次の歴史総合に向けての多くのヒントをいただいている。以上の先生方をはじめとして、他にも様々な先生方にお世話になった。深く感謝を申し上げるとともに、今回の大会で学んだことを現場で生かしていきたいと考えた次第である。

AAWH 大阪大会に参加して

小林昭菜（多摩大学）

2019 年 1 月 6 日、大阪大学で行われた第 4 回アジア世界史大会に参加した。私たちのセッションのテーマは「Another history of Japanese prisoners of war under the cold war」であった。前回 2015 年 5 月末にシンガポール南洋理工大学で開催された第 3 回大会では、「Japanese Prisoners of war under the Cold War」を共通のテーマに、セッションを組織し、発表者それぞれが自身の関心のある、そして得意なテーマについて報告した。そして今回の大阪大会での発表は、シンガポール大会の延長版としての意味を持つものであった。我々のセッションに関して特に強調したいのは、報告者全員が博士号の学位を取得してからの参加であっ

たこと、博士論文で得た研究成果、また博士論文を基にさらに追及を重ねた研究成果をもとに発表できたことである。また、報告者全員が「シベリア抑留」を研究対象とする若手研究者（セルゲイ・キム、森谷理紗、小林昭菜）であることは、シンガポール大会に続き我々セッションのオリジナリティであることも、重ねて強調しておきたい。（シンガポール大会に参加したシェルゾッド・ムミノフは諸事情により不参加。）

セッションにおいて、キム氏はソ連の戦後経済、森谷氏はロシアの音楽と抑留、小林はオーラルヒストリーの観点から抑留史を紐解いた。本セッションのテーマである another history =「もう一つの歴史」とは、「悲劇性」やスターリン批判に焦点が当てられがちな日本人捕虜のソ連抑留史の捉え方、論じ方から脱し、様々な角度から本件を見ていくことに挑戦する意味を込めたものである。それゆえ、キム氏は、冷戦期に未公開だったロシア語公文書史料から日本人捕虜の労働とその経済効果について、日本人の特異性に焦点を当てつつ報告した。森谷氏は、自身が音楽学博士であることから、戦前に日本に伝来したロシア音楽、いわゆる「ロシア民謡」と、抑留経験者がロシアで習得した「ロシア音楽」を一つの歴史のストーリーとして捉え、類似性や共通点を報告した。小林は、２人の抑留経験者を対象に、彼らの意識が軍国主義から共産主義へと変容していくまでの様子を、彼らが置かれた収容所生活環境を基に分析し心理的変化を踏まえ報告した。質疑応答では、舞鶴の引揚記念館の展示について我々専門家の意見を問われる場面や、英米軍の捕虜となった日本人との差異、サハリンに残留した邦人と兵士の抑留とのつながりといったテーマついて、活発な議論が交わされた。本セッションを通して、抑留史を英語で幅広い研究者層に認知してもらうこと、冷戦を東側から考察する必要性の理解が得られたのであれば幸いである。

シリーズ「日本の中の世界史」全７巻完結

執筆者の多くが本世界史研究所の活動にご協力いただいている、『シリーズ日本の中の世界史』全７巻（岩波書店）が、『買春する帝国—日本軍「慰安婦」問題の基底』をもって無事に完結しました。執筆者の皆さまは、それぞれのご専門の知識を活かしつつ、近代史における日本と世界の多様な連動を探る冒険的な試みに挑まれています。以下に改めて、全巻のタイトルを掲載いたします。

・南塚信吾

「連動」する世界史—19 世紀世界の中の日本

・木畑洋一

帝国航路（エンパイアルート）を往く—イギリス植民地と近代日本

・小谷汪之

中島敦の朝鮮と南洋—二つの植民地体験

・久保亨

日本で生まれた中国国歌—「義勇軍行進曲」の時代

・池田忍

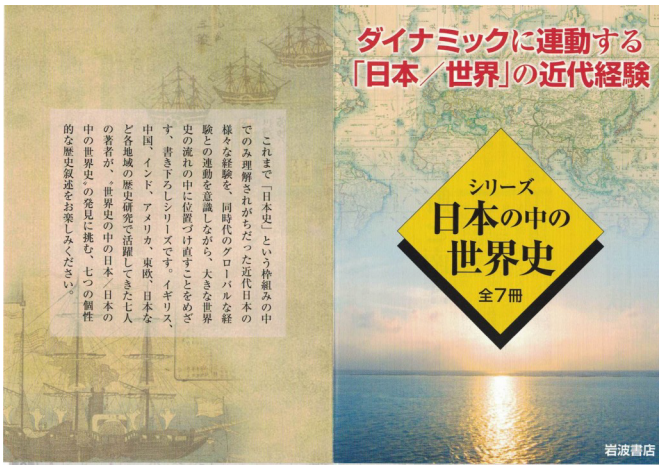
手仕事の帝国日本―民芸・手芸・農民美術の時代

・油井大三郎

Give peace a chance
平和を我らに―越境するベトナム反戦の声

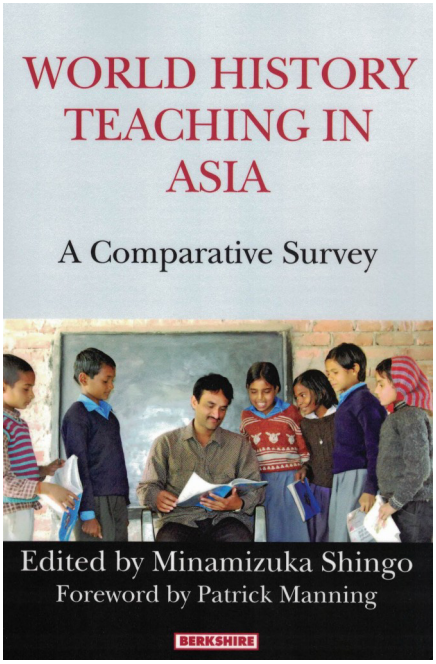
・吉見善明

買春（かいしゅん）する帝国―日本軍「慰安婦」問題の基底



2 World History Teaching in Asia 刊行

2013年8月に始まった世界史研究所プロジェクト、「アジア世界史教育研究」の成果がこのたび刊行されました。8か国の専門家が参加し、ワークショップを重ねた世界史教育の比較研究の成果です。



終刊のお知らせ

2004 年から発行してまいりました『ニューズレター』は、今号をもって終刊となります。渋谷駅東口の再開発計画にともなうビルの解体により、本研究所が所属する NPO 歴史文化交流フォーラムも解散することになりました。これまで、本研究所会員はもとより、母体である同フォーラム会員のご支援も賜りながら活動を続けてきましたが、今後は会員制を廃し、会費をいただくことなく、ウェブ上で世界史ならびに世界史教育に関する情報の受信と発信を行っていく予定です。これまでの会員各位のご支援に、あらためて深謝いたします。

世界史研究所 URL： **http://www.npo-if.jp/riwh/**

なお、世界史研究所『ニューズレター』のバックナンバー各号に関しましては、上記ウェブサイトより PDF 版がダウンロード可能です。

今後とも、当研究所ウェブサイトにご愛顧を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

15 年の長期にわたるご寄稿ご愛読、ありがとうございました。
心よりお礼申し上げます。

『世界史研究所 Newsletter』編集担当一同

発行日：2019 年 07 月 31 日
発行者：NPO-IF 世界史研究所

NPO-IF 世界史研究所

〒 150-0002　東京都渋谷区渋谷 2-17-3　渋谷アイビスビル 10F
tel: 03-3400-1216　fax: 03-3400-1217
e-mail: world_history@npo-if.jp　URL: http://www.npo-if.jp/riwh/

スタッフ

所　長	南塚 信吾（千葉大学・法政大学名誉教授）
顧　問	下村 由一（千葉大学名誉教授）
	百瀬 宏（津田塾大学名誉教授）
研究員	木村 英明（早稲田大学講師）
	木村 真（日本女子大学講師）
	鈴木 健太（東京外国語大学特別研究員）
	山崎 信一（東京大学講師）
	姉川 雄大（千葉大学特任講師）
	崎山 直樹（千葉大学講師）
	鹿住 大助（島根大学准教授）
特別研究員	稲野 強（群馬県立女子大学名誉教授）
	近藤 正憲（学術博士）